

## 総合表現活動の育むもの —磐田こどもミュージカル卒団生の調査より—

内山 尚美

### 1. はじめに

本稿の目的は、総合表現活動を経験した子どもたちがその後の日常生活と進路選択などをどのように経験しているのかを明らかにし、総合表現活動の教育的効果の影響について探るものである。

今日、総合表現活動は社会教育や学校教育などにおいて広く行われている。その運営形態はさまざまであり、自治体や文化振興財団が主催する団体の他に音楽事務所や芸能事務所が行っている団体などもある。そして保育や教育の現場、保育者・教員養成校においても、音楽劇やオペレッタ、ミュージカルなどの総合表現活動が行われており、その実践報告や教育的意義についての研究も多く行われている。

総合表現活動による教育的効果について、福井・太田垣(1998,p.71)は「自己表現力の獲得、正常な人間関係の構築、感動体験の提供、これらがミュージカル教育の軸であり、教育における重要な今日的意義」と教員養成課程におけるミュージカル活動を通して述べている。また文部科学省によるコミュニケーション教育推進会議では「子どもたちの芸術表現体験」を通して「ア) 他者認識、自己認識の力の向上(「受け入れる力」の向上)、イ) 「伝える力」の向上、ウ) 自己肯定感と自身の醸成、エ) 学習環境の改善」という教育的効果が得られることが報告されている。そして筆者は磐田こどもミュージカルの活動事例を通しミュージカル活動から育まれるものを調査・分析したところ、歌唱・舞踊・演技の表現技術力のほかに、人間的成長(他者認識力・自己認識力、自己肯定感による自信、伝える力・コミュニケーション力)が育まれていることを確認することができた(内山、2014)。

このように総合表現活動による教育的効果は多くの研究や報告がされているが、その後の持続性や及ぼす影響については可能性の示唆に留まり、わずかな研究しか行われていない。そこで筆者が携わる磐田こどもミュージカルの卒団生に対する

調査を通して、総合表現活動の教育的効果がその後にどのような影響力を及ぼしているかについて探っていききたい。

### 2. 総合表現活動としてのミュージカル

#### 2-1 総合表現活動の取り組み

総合表現活動には様々な取り組みがある。いわゆる音楽劇は、オペラ、オペレッタ、ミュージカル、音楽劇、などというように名称だけでも多岐にわたる。そして内容においては、それぞれが既成の作品上演といわゆる創作ものとの二種類がある。また活動の組織において、社会教育と学校教育における取り組みの大きく二つに大別されよう。

まず社会教育における総合表現活動は、市民参加型オペラとして1968年10月1日に上演された第1回大分県民オペラ「フィガロの結婚」が最初であると考えられる。その後1973年10月10日に藤沢市民オペラが上演され、1980年代にはアマチュア市民参加によるオペラ創作活動が青森、広島、鹿児島等で起こり、1990年代には更に全国的な広がりをみせた。これらの市民参加型オペラは「歌手や演奏家、演出家たちが求めている発表の場を与えるため」を目的にして誕生した(昭和音楽大学オペラ研究所2004,p.37)。

一方、教育の現場における総合表現活動の先駆けは唱歌劇であるといわれている。唱歌劇は広島高等師範付属小学校訓導の山本壽と同校理事の鯉坂國芳によって、1919年に催された学芸会で初めて披露された。この唱歌劇の目的は、唱歌に劇的動作を取り入れて芸術色を深めることによって、子どもたちの情感を育てようとしたところにある(升田、2015)。

そして保育者・教員養成校における総合表現活動は、多くの実践報告や教育的意義についての研究がされている。表現力育成について、奥(1984)はミュージカルの創作を通して、学生個々の表現力を育成した。更に、紙屋(2003)は、保育者を

志す学生が様々な状況や条件に応じて表現していくことが出来るように、幼児における表現の意義やその活動における保育者の指導法を考える目的としてミュージカルに取り組んだ。

そして総合表現活動の教育的効果は、表現技術力の習得や向上に関するものだけ留まらず、人間的成長に関する記述も確認出来る。福井・太田垣(1998,p.69)は「ミュージカル創造活動の中で、自ら考え、培った知識を内的に総合し、表現することを通じて、社会人として必要な資質能力を身に付けること」が目的であると述べており、総合化授業において良い人間教育を行うための手段としてミュージカルを実施した。土門・山田(2006)は、感動体験の必要性から課外活動として創作ミュージカル活動を開始し、「友だちごっこ」から脱却した真のコミュニケーション力を育成している。

しかし総合表現活動経験後におけるその影響力や教育力について指摘している記述は少ない。表現技術力においては「『新しい表現を創造するよき』を認識すると共に、今後の生活に生かしていく表現力についても気付くといった多面的で長期的な視野に立った学びを形成している」と時得・小町谷(2009,p.252)は述べている。また人間的成長に関して、望木(2010,p.39)は保育者養成校の学生にとって「将来の保育者という立場にとどまらず、大きな財産をもたらした」と述べており、両者ともミュージカル活動で得られた教育的効果の可能性を示すに留まっていると考えられる。

## 2-2 磐田こどもミュージカルの取り組み

筆者が歌唱指導を通して携わっている磐田こどもミュージカルは、平成5年から磐田市民文化会館を拠点に活動を続けている団体である。

平成4年度「しずおか文化の祭典'92 inいわた」の成功を機にして、舞台関係者の「磐田を文化の情報発信拠点にするには、この地方文化を21世紀に継承し、また創造していく若い力を育成していかななくてはならない。それが、私たち大人の役目である。」という力強い一言から「21世紀の地方文化を担う子どもたちの育成事業・こどもミュージカル」運動を展開した。つまり次世代を担う子どもたちに対し、舞台芸術を通じた人間育成を行

うとともに、磐田市から全国へ向けた文化発信を行うことを目的として誕生したのである。その育成目標は以下の五つである。

- ① 将来の舞台芸術を担う人材の育成
- ② 質の高い創作活動
- ③ 感性豊かな人間教育を目指す
- ④ 題材は地域または身近なもの
- ⑤ 時代のメッセージを伝えること

そして制作・指導などは、地方の文化向上のために出来る限り地元の関係者で行っている。上演作品は、磐田こどもミュージカル発足時の取り決めである「地域または身近なもの」という題材に合わせた「ふるさと磐田」をテーマにしたものを中心である。例えば、地域を舞台とした桶ヶ谷沼や旧見付学校、サッカーなどをテーマにして脚本されたものである。このように演じるこどもたちも観るこどもたちにとっても、心に何かを得ることが出来るような題材を上演している。

団員の育成に関しては、まず入団オーディションを実施し、その合格者に対して2年間育成することを基本としている。そして成果の発表の場として修了公演を行っている。

また特記すべきは、磐田こどもミュージカルの活動を官民が協力して支えていることである。官民双方の委員で構成された育成委員会によって決定された活動方針に従い、指導をプロの芸術家に依頼し、事務局運営を市が担当するという官民協働事業という手法を全国に先駆けて導入している。このように民間の手法を生かした練習を積み重ねることによって、公演では質の高い舞台を提供し続けている。

練習内容については、歌唱・演技・舞踊の三分野をそれぞれプロの芸術家が指導している。1回の練習時間は約三時間であり、通常練習は一カ月に2～3回、公演前の3～4カ月は特別練習として週2～4日の練習を行っている。そして育成の目的は舞台芸術経験を通じた人間育成であるため、ミュージカルの三分野(歌唱・演技・舞踊)の他に、生活指導専門の指導者が設けられている。つまり日々の練習や団員同士のコミュニケーション、団員・スタッフ・指導者など関係者全員で一つの舞台を作り上げるという経験を通じて、子どもたちが一人の人間として大きく成長し、芸術

に限らず様々な分野で活躍できるような人材の育成を目指しているのである。

### 3. 研究方法

今回の調査は磐田こどもミュージカルの卒団生を対象とした。磐田こどもミュージカルは、第1回入団オーディションが1993年に実施され、その後2年間の育成期間を基本単位としている。これまでのべ団員数は483名であるが、現在も所属している団員を除いた第1期から第9期における卒団生204名を対象とした。

調査方法としては、無記名のアンケートを実施した。アンケート送付数204名のうち転居先不明が26名であったため、実質送付数は178名である。それに対してアンケート回答返送数は37名であり、アンケート回収率は21%であった。

なお、アンケート回答者の年齢(図1)、所属期間(図2)、性別(図3)は以下の通りである。若年層や第9期生の回答数が少ない原因は、活動

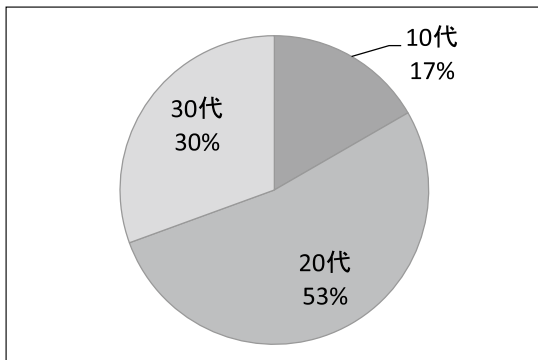


図1 年齢

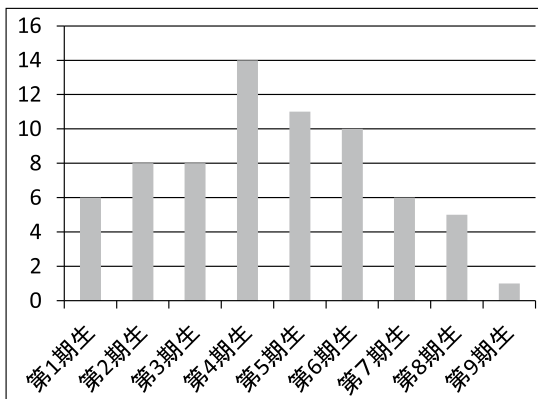


図2 所属期間

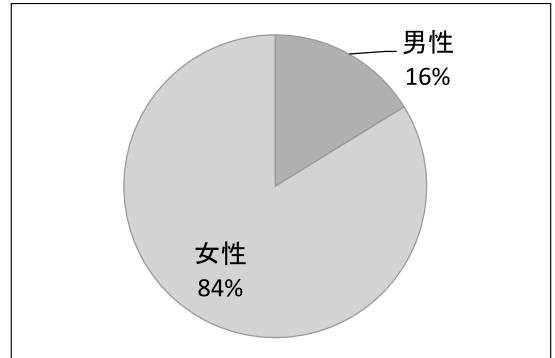


図3 性別

を継続している現役団員がいるためである。また男女比に関しては、現在育成中の第11期生とはほぼ同じ比率である。

### 4. アンケート結果と考察

前述のように本稿の目的は、総合表現活動を経験した子どもたちがその後日常生活と進路選択などをどのように経験しているのかを明らかにし、総合表現活動の教育的効果の影響力について探るものである。そのためアンケート結果を、磐田こどもミュージカルの活動事例の調査から得られたミュージカル活動の教育的効果である以下の視点から分析を行う。

- ①表現技術力
- ②人間的成長
  - (ア) 他者認識力・自己認識力
  - (イ) 自己肯定感による自信
  - (ウ) 伝える力・コミュニケーション力

〈アンケート1〉磐田こどもミュージカルでの思い出・印象を一言で教えてください。(図4)

記述に書かれた最多のキーワードは「公演・本番」に関するもので14件だった。記述の中で「辛かったけど、楽しかった。舞台上でライトをあびて拍手をもらうのは気持ちいい。」「練習は辛かったけれど、本番ステージに立つことが嬉しかった。」というものがあつた。磐田こどもミュージカルでは、育成期間の最後に修了公演という集大成で活動を終えるため、それまでの努力や苦労等が観客の拍手によってすべて報われることになる。またミュージカル活動は目的集団で成り立つ

ものであるため、個人の失敗による挫折感を感じにくいという点からも、良い印象として最後の修了公演を迎え易いのであろう。

〔公演・本番〕は、ミュージカルに関係するメンバーやスタッフの全てが一つになる「瞬間」である。本番を迎えるまでは、作品に対する思いや解釈、その表現についてメンバーやスタッフ、指導者が対峙する関係で切磋琢磨している。しかし本番では、それまでの対峙する関係が同士と変化して、観客と対峙する関係になるため、一体感をより強く感じられるのではないだろうか。例えば「みんなで一生懸命練習してきた成果を舞台にぶつけることが出来て、毎回大きな達成感を得ることが出来た」「舞台を団員全員で作りに上げていく感覚を覚えている。本番後、幕の下がった舞台上でお互いに成功を喜び合う瞬間が最高の思い出」という記述にも一体感の印象の強さがうかがえる。この他に「公演後の感動と達成感」や「公演後の感動の涙」「何かを作り上げる達成感を教えてくれた場所」などという記述に見られる〔感動〕〔達成感〕というキーワードからも、公演・本番に関する印象が最も強く残っていることが考えられる。在団生に対するアンケート「各レッスン・公演を通して一番楽しかったことは何ですか？」においても、最も多い回答は〔公演・本番〕であった(内山、2014)。したがって卒団後にもこの印象が大きく影響していると思われる。

〔公演・本番〕に次いで多かったキーワードは〔練習〕と〔仲間・協力〕であり、共に9件であった。〔練習〕に関しては、「公演前はとても大変だったが、毎回のレッスンがとても楽しかった」「本物(プロ)の指導を受講できたこと」など、練習の取り組み姿勢が修了公演の成功体験に結び付き、また逆に修了公演の成功によってそれまでの練習の印象も良いものになっているのではないかと考えられる。そして〔仲間・協力〕については「作品をみんなで協力して作り上げる楽しさが思い出になった」という記述が4件あった。また練習合間での思い出と思われる「ミュージカルで知り合った友達とおしゃべり、他の中学の子と楽しく過ごせた」というものもあった。

他には〔楽しかった〕6件、〔感動〕5件、〔達成感〕4件、〔その他〕3件であった。その他の記

述は「青春時代の一番情熱を注いだものであり、大部分を占めるもの」「新鮮な体験」「人間関係等は色々あったが、キラキラした思い出」であり、ミュージカル活動が充実していた印象であったと受け取れる。

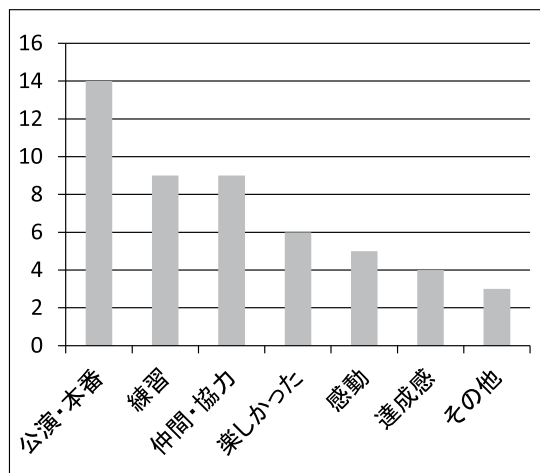


図4 磐田子どもミュージカルの思い出・印象

〈アンケート2〉磐田子どもミュージカルで身に付いたと感じることを教えてください。(図5)

身に付いたと感じることは、ミュージカル三分野の表現技術的なことよりも、主に人間的成長に関することが多く見られた。特に多いキーワードは、〔礼儀〕が12件あり、〔コミュニケーション力〕が11件であった。例えば「人として当然のことが自分には出来ていなかったけれど、色々教えて頂いた。」「礼儀や挨拶をすることの大切さ。一つの作品を作り上げるために多くの人の力を借りているため、仲間との協力することや感謝の気持ちを持つことの大切さ。」「全力で頑張り、充実感、満足感が得られ、それをみんなで共有できるということを学んだ。」などの記述が見られる。作品を協力して作り上げる目的に向かって、良好な人間関係を作るためにコミュニケーションを取る必要があり、その前提として礼儀が必要であったことがうかがえる。

〔表現力〕に関する記述は6件であった。例えば『伝える』ということを中心に考えるようになった」「歌唱力」「声の出し方」などである。ミュージカル三分野の稽古を通して、心のひだを増やし、

内面を表現することによって、伝える手段や技術を学ぶと同時にその重要性を感じたのではないかと考える。そして一つの作品を作り上げる過程の中で、自分の役柄の表現を追求し、そして役割や居場所探しをする。それが自分と向き合う事に繋がり自己認識力を育むことになったのであろう。また役割・居場所探しは、集団の中や相手との関係性において自分の位置を認識するということであると考えられる。つまり自己認識力・他者認識力を同時に育むことが出来たのではないかと推測される。

そして「人前で話すときに緊張しなくなった。」「歌やダンスなどを習い、自分に自信がついた。」というような「自信」に関するものが5件あった。これらは他者認識力・自己認識力が育まれたことによって自己肯定感を培われたことから自信に繋がったのであろうと考えられる。

また「団体行動の大切さや規律を守るという事。責任感。上級生が下級生の面倒を見る縦割り班での行動。」という記述も見られた。これは異年齢集団での活動によって、自分の一歩先を歩くモデルを実際に間近で見ることが出来るために「〇〇お姉さん(お兄さん)のようになりたい」という具体的な短期目標を設定できたと考えられる。これらも他者認識力・自己認識力の育成を促している要因の一つであろう。

このように他者とのコミュニケーションを円滑に行うために、礼儀や挨拶、集団行動、表現力などが身に付いたと自覚できたのではないだろう

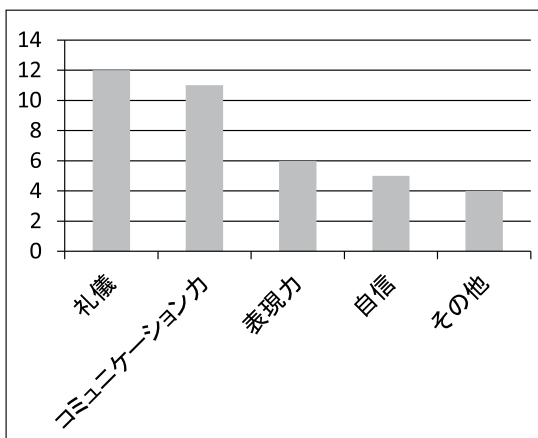


図5 身に付いたと感じること

か。つまり表現することを手段として、自己肯定感が生まれ、そして人間力が育まれ、人間的成長へ繋がったのではないだろうかと考えられる。

〈アンケート3〉ミュージカルの経験がその後役に立ったか教えてください。(図6)(図7)

この質問に対して、100%が「役に立った」と回答している。

役に立っている内容は、歌唱技術が24%、舞踊技術が20%、演技技術が16%であり、日々の練習で行っていた三分野の表現技術全体としては60%になった。

ミュージカル経験で身に付けた表現技術が直接役立っている記述として「歌唱は、学校の音楽の授業や合唱コンクールで役に立っている。」「人前で話をしたり、発表したりするときに、演技の指導で教わった話し方を意識した。」などがある。中には「小学校で教員をしているため、学芸会や運動会のダンスなどでとても役立っている。普段の授業でも、例えば国語の音読などで『何を伝えたいか』ということテーマに語る事が出来るし、行動や言葉を通して何を伝えたいか、という事を教員生活の中のテーマに掲げているくらいである。」というように就職した職業において役立させている記述があった。またミュージカル経験を通して、以後の生活を豊かにしていることがうかがえる「芸術を理解しようとする事は、心が豊かになり、楽しみを持てるようになった。」というものもあった。

また「生活面」に関する内容は34%であった。その中でも人間的成長に関する事は、日々の練習を通して育まれたと受け取れる記述が多かった。例えば「自分が成人になるにつれて、外との接触が段々増える中、挨拶は初めからしっかり出来たこと。礼儀の基本的なことはわきまえていたので、特に指摘を受けることは無かった。」という礼儀に関する記述や、「後輩を指導したりまとめる力は学校や仕事のあらゆる場面で役立った。」という伝える力・コミュニケーション力に関するもの、そして「学生時代や就職後もプレゼンテーションなどで人前に出ても堂々とする事が出来た。」という自己肯定感による自信に関するものである。また「演技指導の中で役についてその立

場に立って考えて台詞を言ったり動いたりということをやっていたので、日常生活でも他人の立場を考えて行動しようと心がけるようになった。」という記述も見られた。これはミュージカルの表現技術習得のための題材（教材）を通して育まれたものであろう。

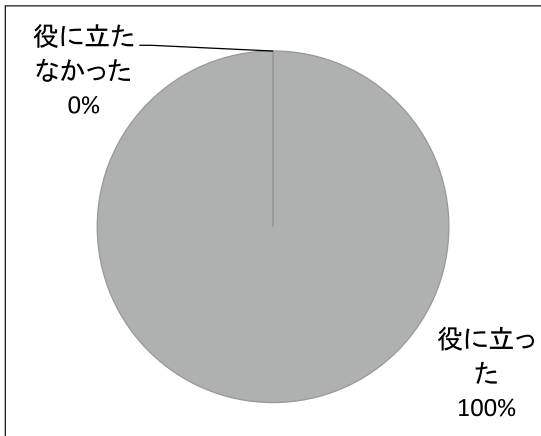


図6 ミュージカル経験が役に立ったか

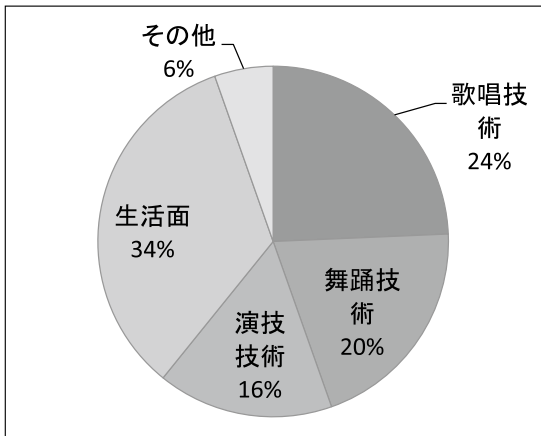


図7 役に立った内容

〈アンケート4〉ミュージカル経験の影響について教えてください。(図8)(図9)

その後の人生におけるミュージカル経験の影響については、[影響有]が89%、[影響なし]が11%であった。

[影響有]の内容は、[人間的成長]が41%で最多である。例えば「幼い頃から所属していたときも吃音があったが、人前で『どもってもいいから話すんだ』という気持ちを少しだけ持てた。」

「人前に出るときの自信、表現力。」という自己肯定感や、「歌うことが好きになった。演技をすることは苦手だという事が分かった。人前に立つことや人前で発言することなどに抵抗が少なくなった。舞台は少しずつ長い時間をかけて沢山練習をしてたくさんの人と創る、という事が分かった。」  
 「私は歌も演技もダンスも飛び抜けて出来る訳ではなかった。だから将来プロの表現者としてというのは難しいと思った。けれどどれも大好きだったし、ミュージカルを通して表現することの喜びや大切さを知り、私の中では自分を支える大きな自信になった。子どものころから身近に触れることが出来たのが大きかったと思う。だからそれを色々な人に体験して欲しいと思った。小学校なら万人が通ってくるし発表の場=表現の場も多い。だから今の仕事を選んだし、この仕事をしていく上でミュージカルでの経験は私に大きな力を与えてくれているように思う。」という記述から、他者認識力・自己認識力から自己肯定感が生まれ、現在の自分へと繋がっていることがうかがえる。そして「人とコミュニケーションをとることが元々好きだったが、入団して更に人とのかかわりの楽しさを感じる事が出来た。」「日々の練習や舞台を経験することで、自身や芸術に対する興味を持った。自分自身の能力は勿論、他者に対してのコミュニケーション能力や礼儀を身に付けることも出来た。」というコミュニケーション力に関する記述も見られた。

また卒団後にミュージカルに関連することを37%が[趣味]にしている。例えば「習い事やサークルをしている。」「大学で舞踊部に入部。舞台の裏方、衣装、振付など幅広く経験でき、友達も出来た。」「大学で合唱団に入り、全国大会にも参加した。」「ピアノを習い始めた。」「ミュージカル、コンサート、演劇鑑賞が好きになった。」などの記述に見られる。そして「進路選択」への影響は10%が感じており、「子どもたちと接する仕事に就く夢を持てた。」「同学年で同じ高校へ進学した8人中3人が演劇部へ入部し、高校でも作品作りができたのは貴重な体験だった。ミュージカルの影響で大学に行き、舞台芸術に沢山触れることが出来た。」という記述がある。「職業選択」では8%がミュージカル経験の影響を感じており、「進路

を考えたときに、ずっと続けていたのがミュージカルだった。そして上京し、演劇の大学へ進学。最初は有名になってやると意気巻いていたが、今では演劇を通しての人との触れ合いに強く惹かれている。特に子どもたちとの創作。人と何かやりたいという気持ちは、ミュージカルの影響が大きい。」「大学の音楽科に進学し、卒業後もプロの演奏家としてコンサート活動などを行っている。」「スポーツインストラクターとしてレッスンをするとときに役立っている。」という記述にみられる。これらはミュージカルの経験で得た表現の楽しみや表現の継続、そして更に追求し続けていることの表れであろう。

またその他では「物事に対して探求心を持つことが出来るようになった。」というものも見られた。

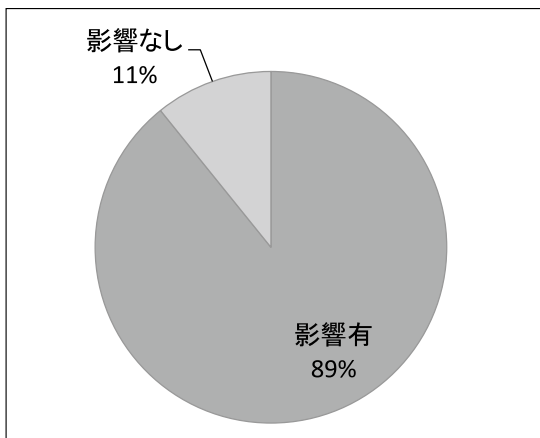


図 8 ミュージカル経験による影響の有無

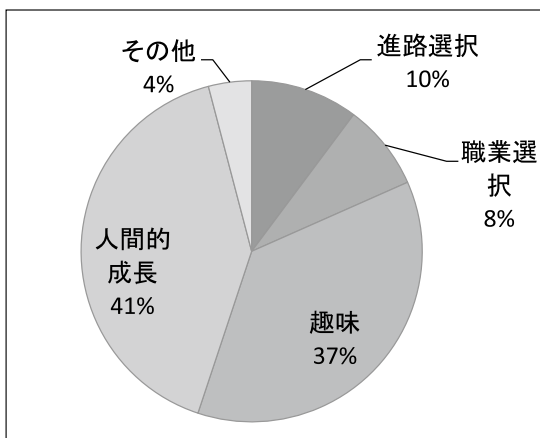


図 9 ミュージカル経験の影響内容

〈アンケート5〉 卒団後、磐田こどもミュージカルの公演を観覧されたことはありますか？ (図10)

観覧回数 [0回] が最多の38%であった。次いで [1回] 24%、[2回] 19%というように回数が増加すると共に、観覧した卒団生の割合が減少している。一方で [7回] という多数回観覧した卒団生が3%いる。卒団生への公演周知を行い卒団生の観客動員率を上げることが、ミュージカル活動が地域へ浸透する核となり、新入団員の確保や活動の場が拡大される等のミュージカル活動の活性化に繋がる可能性が考えられる。

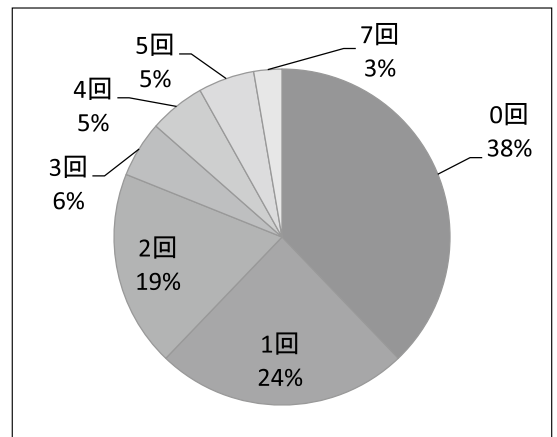


図10 卒団後の公演観覧回数

〈アンケート6〉 磐田こどもミュージカルに関して、何でも書いてください。(図11)

〔良い思い出〕に関するものが14件であった。記述には「今でも本当に『やって良かった』と思うことが多々ある。あれだけ充実したプロの指導を受けられる子どもミュージカルはなかなか無いと思っています。」「公演が近づく練習はととても大変でしたが、今ではそれが大きな思い出になっている。一つのことに向かって、みんなと協力し、得られる達成感やあの感動は中々経験出来るものではない。」「ミュージカルが無かったら間違いなく今の私は無かったと思う。」というものがあり、総合表現活動の経験が良い印象になって残っていることが推測される。

また [友人] に関する記述は7件あり、共に舞台作品を作り上げた仲間との繋がりが現在も続い

ていると考えられる。一方、「ミュージカルで同じ舞台に立ったメンバーは友達というより仲間や同士といった方がじっくりくるような気がする。全く連絡は取り合っていないが、今もそれぞれの場所ですごく輝いているんだろうなと信じられる。そしてどんな風に活躍しているか、それぞれの場所での物語を私も聞いてみたい。」という記述から、現在の繋がりは無いが心の支えになっていることが考えられる。そして「大学進学後は磐田から離れた生活になったが、今後も何かに関わられたらいいな、と思っている。」「練習は大変だったけど本当に楽しかったし、ミュージカルをやって本当に良かったと思っている。将来自分の子どもにもやらせたい。」などのように、地域や次世代への可能性を示す記述もみられた。

そして「磐田子どもミュージカルで学んだことは、かけがえない財産である。今後も伝統を守り、さらに発展させてほしい。」というような「今後への期待」を記したものが7件であった。

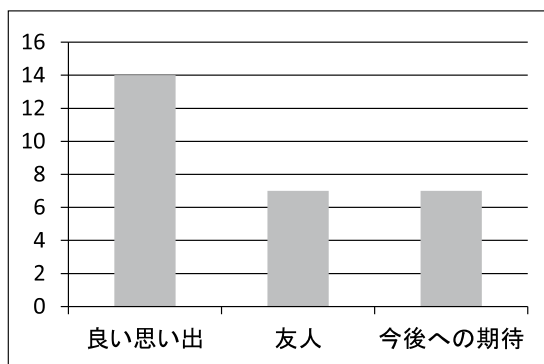


図11 磐田子どもミュージカルに関する自由記述

〈アンケート7〉現在の所属を教えてください。(図12)

〔教育関係〕が26%であり、全体の1/4を占めている。平成22年国勢調査によると社会全体の割合としては「教育・学習支援業」が4.4%であり、卒団生の割合が大幅に上回る結果となった。そして〔舞台芸術〕は19%である。現第11期生の指導スタッフ14名中、4名が卒団生でもある。また〔医療関係〕(正規・非正規・学生)は13%であるが、社会全体における〔医療・福祉〕の割合が10.3%であり、この分野においても卒団生が上

回っている。以上のように〔教育関係〕〔医療関係〕〔国際関係〕はコミュニケーション力が大きく関わる分野であり、その割合の合計は52%になる。その点においても、ミュージカル経験で育まれた力が影響しているのではないだろうかと推測される。

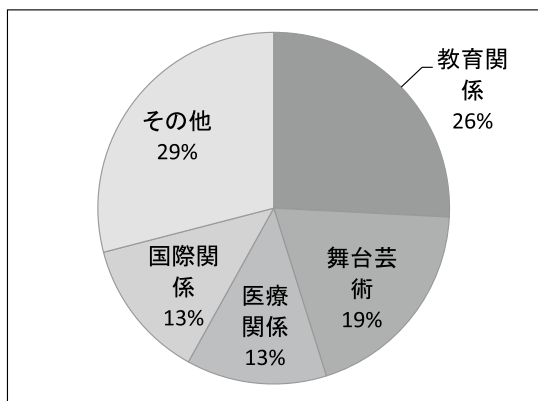


図12 現在の所属

## 5. まとめと今後の課題

総合表現活動で育まれた力が、その後の生活へどのように影響しているかについて調査を行った。その結果、卒団後もミュージカル活動で得られた教育的効果である表現技術力や人間的成長が持続し、その後の生活や人生にも影響を与えていることが確認された。

表現技術力に関しては、歌唱・舞踊・演技の表現技術について更に専門的に勉強するために、関係筋への進学・就職が見られた。また直接関連の無い職業へ就いていても、趣味として継続している者も見られた。ミュージカルの経験で得た表現する楽しみや表現の追究及び継続を行っていると言ってもいいだろう。

また人間的成長に関しては、他者認識力・自己認識力、自己肯定感による自信、伝える力・コミュニケーション力のいずれもが、その後の生活に影響を与えていることが確認された。このミュージカル活動の経験により自信が付き、その後の生活の中でも自分自身をさらけ出すことに対して抵抗感が薄れているように受け取れる。そして人前でも緊張することなく話したり歌ったりすることが出来ていることから自己肯定感による自信が継



続していることが考えられる。このようにしてミュージカル活動により得られた他者認識力・自己認識力から自己肯定感が継続し、育まれていると考えられる記述が散見された。更に職業選択において「教育関係」や「医療関係」の職に携わる率が高くなっていることが確認された。これは、総合表現活動で育まれたコミュニケーション力により、人との関わりに対する興味関心の影響と考えることができよう。したがってこれらの他者認識力・自己認識力、自己肯定感による自信、コミュニケーション力の影響力は、それぞれが一方通行で影響しているのではなく、相互作用していると考えることが可能である。

しかも「磐田の町が好きになった。」「地元の歴史について知ることや愛着。」という記述に見られるように、自分自身の育った地域への愛着を表すものも確認された。これは地域に関する題材の作品を通し、自分の表現の探索と共に自分のルーツを実感し、公演の成功により自己肯定感が育まれたことを示唆しているのではないだろうか。このようにして生まれた地域への愛着は、地域の人材育成にも繋がるであろう。

そこでこのような総合表現活動で育むことの出来た様々な力を、地域で生かしていくための場の設定や確保が必要であろう。地域へ還元できることによって、更に地域文化が深まり、一部の人たちの文化ではなく、地域全体で作り継承していく文化創造のサイクルも不可能ではないかもしれない。

そしてこの総合表現活動は、学校教育と社会教育双方のアプローチがあってこそ教育的効果が高まり深まり、地域の文化振興をより進めることが可能であると考えられる。そのために学校教育における教科音楽や総合表現活動の意義、そして社会教育における総合表現活動の意義を明らかにすることが必要であろう。それと同時に相互の活動や関係性を持たせることが出来るようになれば、さらに文化振興の好循環が生まれるのではないだろうか。

今回は総合表現活動としてのミュージカル活動によって育まれた力がその後の人生にどのように影響しているのかについて調査した。しかし今回は調査数が少なく、総合表現活動に対するマイ

ナスの影響についての調査が十分ではない。したがって解明できたことは必ずしも多くないが、若干なりとも寄与できたのではないかと思われる。今後はこれらの問題点を解決し、更に質的調査などを通して、総合表現活動であるミュージカル活動によって育まれるものを追求していきたいと考える。

## 【文献】

- 磐田市・磐田子どもミュージカル育成委員会 (2015)「しっぺいのものがたり 磐田子どもミュージカル2015」磐田市合併10周年記念公演パンフレット
- 内山尚美 (2014)「ミュージカル活動が育むもの—磐田子どもミュージカルの活動事例から—」『音楽表現学』第12巻, pp115.
- 奥忍 (1984)「日常語に根ざした音楽学習—奈良方言による創作ミュージカル「かさじぞう」—」『奈良教育大学教育研究所紀要第20号, pp.103-122.
- 紙屋信義 (2003)「保育者養成における子どもミュージカル発表の実際—附属幼稚園での「こぶとりじいさん」の実践を通して—」『千葉大学教育学部研究紀要』第51巻, pp307-311.
- 昭和音楽大学オペラ研究所 (2004)「公開講座 日本オペラ100年の歴史 I ~講義録」(文部科学省特別補助「オープン・リサーチ・センター整備事業」)
- 時得紀子・小町谷聖 (2009)「総合表現活動のもたらすもの—上越教育大学付属中学校「表現創造科」の実践から—」『上越教育大学研究紀要』第28巻, pp243-256.
- 時得紀子・遠藤好子・小町谷聖 (2011)「創作表現活動で培われる力を視座とした実践的研究—舞台制作過程と生徒への意識調査を基に—」『日本教育大学協会研究年報』第25集, pp41-54.
- 土門裕之・山田克己 (2006)「創作ミュージカル活動の実践—課外活動から授業化に至るまでの変遷と改革」『音楽教育実践ジャーナル』第3巻 (2), pp63-69.
- 升田真依子 (2015)「山本壽の唱歌劇に関する研究」『広島大学大学院教育学研究科音楽文化教育学研究紀要』第17号, pp87-95.

- 福井一・太田垣学（1998）「総合的表現教科としての「ミュージカル」」『奈良教育大学紀要』第47巻第1号 pp65 - 72.
- 望木郁代（2010）「創作ミュージカルによる教育効果の実証的研究」『保育士養成研究』第28巻, pp31 - 40.
- 文部科学省（2011）「子どものたちのコミュニケーション能力を育むために～「話し合う・創る・表現する」ワークショップへの取組～の審議経過報告のとりまとめ」[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/houdou/23/08/\\_icsFiles/afieldfile/2011/08/30/1310607\\_2.pdf](http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/23/08/_icsFiles/afieldfile/2011/08/30/1310607_2.pdf)（最終アクセス 2016/9/30）
- 山本珠美（2007）「市民参加型舞台芸術に関する序論的考察」『香川大学生涯学習教育研究センター研究報告』第12巻, pp29 - 50.

## **The Life Effect of Expression Activity with Music —The case study on Iwata Kodomo Musical alumni—**

Uchiyama, Naomi\*

本稿の目的は、総合表現活動を経験した子どもたちがその後日常生活と進路選択などをどのように経験しているのかを明らかにし、総合表現活動の教育的効果の影響力について探るものである。

今日、総合表現活動は社会教育や学校教育などにおいて広く行われている。その運営形態はさまざまであり、保育や教育の現場、保育者・教員養成校においても、音楽劇やオペレッタ、ミュージカルなどの総合表現活動が行われており、その実践報告や教育的意義、教育的効果についての研究も多く行われている。

総合表現活動後における教育的効果について、筆者が携わる磐田こどもミュージカルの卒団生に対してアンケート調査を行った。これまでに総合表現活動は、表現技術力の他に人間的成長という教育的効果を育むことが確認されている。そして今回の調査により、総合表現活動を終えた後にもその教育的効果が継続し、その後の生活や人生にも影響を与えていることが確認された。しかし今回は調査数が少なく、総合表現活動に対するマイナスの影響についての調査が不足している。今後はこれらの問題点を解決し、更に質的調査などを通して、総合表現活動による教育的効果を更に追求していきたいと考える。

キーワード：総合表現活動, ミュージカル, 音楽表現

